

二〇二〇 令和からの発信 — 兵庫の書 —

近年、地方自治に関するキーワードとして「シビックプライド (Civic Pride)」という言葉に注目が集まっている。この言葉が意味するものは、「都市に対する市民の誇り」という概念である。日本の「郷土愛」といった言葉と似ているが、単に地域に対する愛着を示すだけではない。生まれ故郷でなくても、自分たちが「まち」をつくり、動かしているという誇りを持つこと、そうした地域に住む一人一人の都市に対する「愛着」、「誇り」、「共感」がシビックプライドなのである。

「兵庫の書」、それはまさに兵庫県民の「シビックプライドの象徴」に他ならない。安東聖空や上田桑鳩、戦後展覧会芸術として発展した日本の書道文化を牽引したのは間違いなくこうした兵庫の書家達である。京都や東京と比較して文化的な歴史・土壌がないのにも関わらず、戦後、文明開化のまち神戸を中心に、兵庫には多くの書家が集まった。彼らは自らの手で、京都・東京に比肩し得る「兵庫の書」という文化を生み出し、誇りと力を持ってまちを動かし、兵庫の文化的発展を後押しした。やがて、兵庫の書の影響は、岡山、広島といった近隣の都市にまで波及、そして、そうした都市間の競争が中国山陽の書道文化を醸成したと言っても過言ではあるまい。

兵庫県書作家協会が発足して、今年で七〇年の年月が経過する。この歴史は、まさに現代書道の歴史である。そして、今も日本の書道文化を牽引する書家達が兵庫に集まっている。令和の新時代、「兵庫の書」という誇りを胸に、兵庫の書家達は新たな歴史を築きあげるのである。

第一部 兵庫の漢字書

展覧会芸術として発展した現代書道において、「作品を魅せる」こと、すなわち様式面の追求は必然であった。帖学の伝統が残る関西書壇においては、王羲之を中心とする晋唐の書風を至上とする気風が色濃く残っていた。そこに、王鐸、傅山、といった明清の書の力強さが加わることにより生み出された新しい書のカタチは、大阪で発足した日本書芸院を中心に関西の書道界に新たな火を灯したのであった。

そうした中、木村知石、広津雲仙、岡本松堂といった兵庫の漢字書家達は、当時書壇をリードした他の漢字書家達とは一線を画す中国明末清書の書表現で書壇を席捲した。躍動する筆致、延々と続く息の長い線、連綿の妙、帖学の伝統、晋唐の表現を基盤としつつ、そこに何紹基や張瑞図、趙之謙といった書の香を加える事により、装飾的で華やかな書表現を確立したのである。それはまさに、京都でも大阪でもない、兵庫の漢字書なのである。

岡本松堂
おかもとしょうどう



一九一〇—二〇〇二

広島県生まれ。

辻本史邑に師事。

昭和三五年（一九六〇）墨彩会創立主宰、

昭和四四年（一九六九）現代書道二十人展出品、

昭和五二年（一九七七）日展内閣総理大臣賞。

日展参与、読売書法会総務など。

「菜根譚」

好動者 雲電風燈 嗜寂者 死灰槁木
須定雲止水 中有鳶飛魚躍氣象
纔是有道的心體

額装

一点

紙本墨書

二二〇・五×六五

墨彩会蔵

おかもと しょうどう
岡本松堂

本作からは、倪元璐に近いリズムを感じる。しかしながら、その線からは、師である辻本史邑の影響であるうか、富岡鉄斎やあるいは池大雅といった書の雰囲気を感じさせる。書というものが、筆者がそれまでに学んできた全てが表出するものであるということをも本作は物語っている。

木^き 村^{むら} 知^ち 石^{せき}

一九〇七—一九八三



大阪府生まれ。

黒木拝石に師事。

昭和二八年（一九五三）玄雲社創立、

昭和四四年（一九六九）

朝日現代書道二十人展出品、

昭和五年（一九七六）日本芸術院賞受賞。

日展常務理事など。

「鴛鴦延壽」

鴛鴦延壽

一九八四年

額装

一点

紙本墨書

六八×六九

玄雲社蔵

木村知石

方形に四文字の本作は、分類上、小字数書と言えようか。大胆な滲みと渴筆を用いながら、行間を巧みに操り紙面をまとめる。その文字造形の根底には、米芾や王鐸が見え隠れする。絶妙に字形を遊ばせながら、確かな技術を示している。

「元好問句」

木村知石

雲黯淡花狼藉
(元好問)

一九七八年

額装

一点

紙本墨書

二二四・五×五二

玄雲社蔵

いわゆる二尺×八尺縦に五文字の本作は、書作品としては文字粒が大きい方だろう。しかしながら、字形にも線にも破綻がない。そこには、確かな古典学書に裏付けされた仕事が見える。筆を押し開く、息の長い運筆は王鐸の影響か。



國くに
川かわ
喜き
祥しょう

一九二八—二〇〇九

山口県生まれ。

広津雲仙に師事。

日展会友、読売書法会参与、日本書芸院参事、
兵庫県書作家協会参事、墨滴会参事、
三滴会会長などの要職を務める。

「竹里館」

擱坐幽篁裏
深林人不知

彈琴復長嘯
明月來相照

二〇〇九年

掛幅装

一幅

紙本墨書

一三四×三四

個人蔵

國くに川かわ喜き祥しやう

滲みの強い紙に、思い切った含墨から
落差のある渴筆表現を出すことで
変化を付けている。墨が少なくなっ
てからの、やや細身の柔らかい線質や
造形に、どこことなく日本的な表現を
感じる作品である。

「なにくそ人生」

くにかわ
川
きしやう
喜祥

なにくそ人生

一九九五年

掛幅装

一幅

紙本墨書

一三三三×三三三・二

個人蔵

漢字かな交じり書（調和体）に分類されるのであろうが、まるで書かれている文言そのものを表現しているかのように、細部にとらわれることなく、思い切って書されている。震災直後に書かれたその精神性と表現は、どこか墨跡を見る思いがする。

「王維詩」

十里華川上 年來足勝游
雨花林下寺 風柳驛邊桜
漠漠芙蓉浦 依依杜若洲
平生身外事 未許付浮鷗

掛幅装

一幅

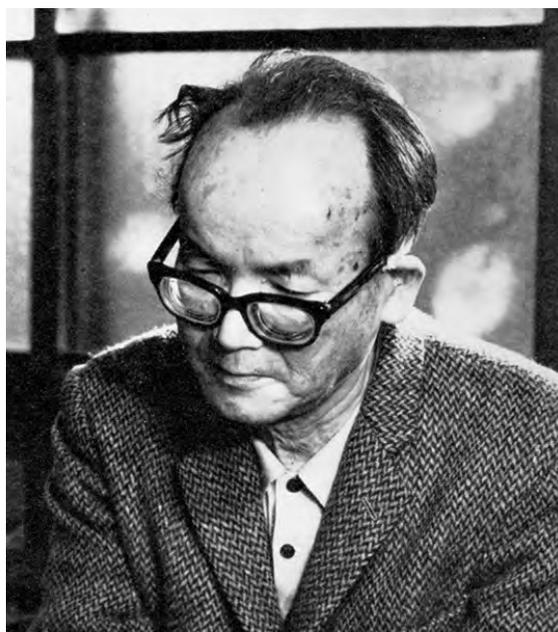
紙本墨書

一三六×三四

個人蔵

國くに川かわ喜き祥しやう

この作からは、良寛・夏日漱石の行草に近いものを感じる。漱石の行草の基盤は、寂厳や良寛といった書である。省略を利かせながら、線を少なく見せつつ、そして流れを生み出す。仮名にも通ずる、日本的な空気をまとった作品である。



墨谷鶴村
すみ たに かく せん

一九〇七—一九七六

加古川市生まれ。

丹羽海鶴に師事。

昭和三年（一九二八）文検習字科合格、

昭和二四年（一九四九）日展初入選、

以後二十一回入選。

武庫川大学助教授、日本書芸院顧問など。

「遊 僊」

遊
僊

額装

一点

紙本墨書

四五×五一

個人蔵

墨谷鶴村
すみ たに かく そん

筆を沈めた確かな運筆からは、師の丹羽海鶴の影響が感じられる。文字の大小をはつきりとつけ、「遊」のシンニヨウの横張と「僊」の縦線を対比させながら、紙面右の余白に落款を入れることで巧みに空間を処理している。

「陸翬詩」

鶯帰樹頂繁聲轉
雁去天邊細影斜

掛幅装

一幅

紙本墨書

一三九×三八

個人蔵

墨谷鶴村
すみ たに かく そん

本作は、柔らかい文字造形や線で書かれているが、どこことなく洒脱な富岡鉄斎の書を彷彿させる。同時期に関西で、また日本書芸院という同じ団体に活躍した辻本史邑の影響であろうか。本作における、書の演出としての巧拙の織り交ぜ方は注目に値しよう。

「青山の歌」

青山昨送我
青山今迎吾
黙数山陽十往返
山翠依然我白鬚
故郷有親更衰老
明年当復下此道

掛幅装

一幅

紙本墨書

一三九×三七

個人蔵

すみ
谷
かく
鶴
そん
村

本作からは、王鐸といったいわゆる明末清初の行草書の影響が感じられる。辻本史邑の影響もあるだろうが、当時、関西で流行しつつあった明清の長条幅の表現に、いち早く筆者も注目していた様子が窺える。

佐藤 宋石



一九二一—二〇〇八

山形県生まれ。

木村知石に師事。

昭和三七年（一九六二）日展初入選、

以来入選十八回、

日展会友、読売書法会総務、日本書芸院参与
兵庫県書作家協会顧問などの要職を務める。

「李白詩」

晚登高樓望
寒山饒積翠
日送楚雲盡
相思子可見
木落雙江清
秀色連州城
心悲胡雁聲
迴首故人情

軸装
一点

紙本墨書

二二七×五九

個人蔵

佐藤 宋石
さとう そうせき

王鐸の書風を骨格に据えた作品だと思われるが、至るところに同時代に活躍した書家の影響も垣間見え、大変興味深い。公募展を舞台に、会派を超えた刺激を受けながら練磨を重ねた様子が窺えると言えよう。

納のう庄しょう素そ山ざん



一九二六—二〇二二

高砂市生まれ。

岡本松堂らに師事。

昭和四年（一九六六）日展初入選、

以来入選十四回、

帰正会主宰、兵庫県書作家協会参事、

日本書芸院参与、墨彩会相談役、

黎明書道会会長などの要職を務める。

「龍 虎」

龍
虎

屏風装

一点

紙本墨書

一三九×四九×二

個人蔵

納庄素山
のうしやうそざん

二曲二隻屏風の第二扇と第三扇、それぞれの上部に大きく一字ずつ、それぞれ「龍」「虎」を大書して配し、独自の構成でまとめる。宋代の古典が骨格に見えるが、直線的なキレのある表情は、張璪図や倪元璐の影響を思わせる。

樋口尾山ひぐちびざん

一八九五—一九八七



加古郡尾上村生まれ。

近藤雪竹に師事。

大正三年（一九一四）文検習字科合格、

昭和三年（一九五六）水莖会結成、

昭和四二年（一九六七）兵庫県文化賞。

武庫川女子大学教授など。

「雪月花」

雪月花

額装

一点

彩箋墨書

三三×一〇六・五

黎明書道会蔵

樋口尾山

羊毛筆にたつぷりと墨を含ませ、ふくよかな線でゆったりと運筆する。あたたかも円相のように窓を描き、その中に二文字ずつ配置している。扁額形式にバランスよく書かれた本作からは、洒脱な現代的な書作品の趣を感じる。

「黎明」

黎明

額装

一点

彩箋墨書

六七・五×三一・五

黎明書道会蔵

樋口尾山ひぐちびざん

楊峴の影響を思わせる隸書作品である。関西で明末清初の長条幅に倣った行草書が流行の兆しを見せつつあったが、行草書のみならず、隸書においても清朝の風が注目されていた様子が窺い知れる。

廣^{ひろ}
津^つ
雲^{うん}
仙^{せん}

一九一〇—一九八九



長崎県生まれ。

辻本史邑に師事。

昭和二九年（一九五四）墨滴会主宰、

昭和四三年（一九六八）日展内閣総理大臣賞、

昭和四七年（一九七二）日本芸術院賞。

日展常務理事、中京大学教授など。

「高青邱詩」

山游期屢阻 風雨過今春 偶遂林泉賞 仍同里開親
極重迷卓午 華盡謝芳展 事註非前代 僧逢是故人
金精銷虎氣 寶藏衛龍神 妖魄憐埋玉 仙詩看勤珉
季登厨有供 邨遠寺無鄰 池古寒泉定 林喧夏果新
井名猶記羽 樓姓尚題陳 步策方循澗 廻繞已待津
緣雖喧寂異 忘本去來均 摩壁追高韻 應慙繼後塵

掛幅装

一幅

紙本墨書

二二一×七二

個人蔵

廣津雲仙 ひろつ うんせん

北宋の第八代皇帝である徽宗が考案したとされる、「瘦金体」を思わせる書風である。廣津雲仙の楷書は、鄭道昭風が代名詞のように語られるが、本作を見るとそれだけに止まらず、多種多様な書風に触れていた様子が窺い知れる。

「高青邱詩」

何處可徘徊
有地唯栽藥
居似臨邛宅
把卷憐長日
晨妝出采芳
抱筐歸蕙徑

林間共水隈
無村不見梅
耕非鄠杜田
看花愧少年
零露濕紅裳
焚鼎薦蘭堂

夜歸家犬識
興來慙獨飲
已償輪稅米
儵然閉門處
種徙山中品
未足娛君寢

春睡野禽催
時喚老農陪
未覓壳文錢
楊柳枯棹辺
熏傳海外方
西施體自香

掛幅装

一幅

紙本墨書

二二六×三三三×二二

個人蔵

廣津雲仙

廣津雲仙の行草書と云えば、張瑞凶が真つ先に浮かぶだろう。本作もまた、右上がりの直線を主体とした張瑞凶風の造形に、王鐸を思わせる右回転や息の長い連綿線を融合した、雲仙の面目躍如たる優品である。



藤^{ふじ}本^{もと}士^し啓^{けい}

一九二三—一九八九

大阪府生まれ。

木村知石に師事。

日展会員、日本書芸院常務理事、

読売書法会理事、玄燿書道会副理事長、

兵庫県書作家協会参事などの要職を努める。

「壺中天地乾坤外」

壺中天地乾坤外

額装

一点

紙本墨書

二一・五×一二二・五

個人蔵

藤本士啓

横長の扁額形式で重心を高くし、脚部を明るくまとめる。極限にまで文字の造形を遊ばせながら、文字性を失っていない点は古典学書の裏付けがあつてのものだろう。師・木村知石とは対照的に連綿を切りながらも、横への流れを演出している。

「世情冷暖杯中酒」

世情冷暖杯中酒

額装

一点

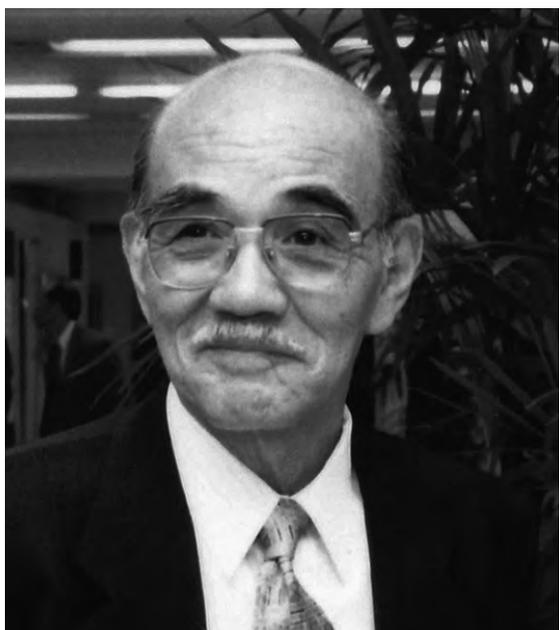
紙本墨書

三五・五×六三・五

個人蔵

藤本士啓

師・木村知石の影響を強く漂わせる作品である。中央の「暖」の字で、横線を大きく利かせながら渴筆気味にすることで奥行きを出し、隣の「中」の字の長い縦線と対比させている。師匠譲りの造形バランス感覚を遺憾なく発揮している作品。



山根溪石

一九二七—一九九九

鳥取県生まれ。

石橋犀水・木村知石に師事。

日展審査員、読売書法展企画委員、

日本書芸院董事、玄燿書道会会長、

兵庫県書作家協会会長などの要職を務める。

「規億載」

規億載

額装

一点

紙本墨書

五五×六九・五

玄耀書道会蔵

山根溪石
やまね けいせき

山根溪石と言え、師・木村知石譲りの行草書に加え、本作のような木簡調の作品が有名であり、毎日系や謙慎系の木簡調とは異なる、独自の境地を切り開いた。本作からも、紙面全体にほとばしる、揺るぎない引き締まった空間に、筆者の気迫を感じる。

「飛 螢」

飛
螢

掛幅装

一幅

紙本墨書

二二×五〇

玄燿書道会蔵

やまね
山根
けいせき
溪石

扇面形の書作品はよく目にするが、単に扇面形の紙に書いただけのものと、形だけでなく扇の骨に合わせた折れ目のある紙に書いたものがある。本作は、よく観察すると折れ目のある状態で書いたことが分かる。その折れ目が、独特な風合いを醸し出し、一種異なる線の強さを引き出している。

廣^{ひろ}
津^つ
岱^{たい}
雲^{うん}

一九四三—二〇二一



兵庫県生まれ。

広津雲仙に師事。

平成元年（一九八九）墨滴会会長、

日展会員、読売書法会常任理事、

日本書芸院董事、

兵庫県書作家協会参事などの要職を務める。

「高青邱詩」

登城望神州 風塵暗淮楚
江山帶睥睨 烽火接樓櫓
并吞何時休 百骨易寸土
向來禾黍地 雨露長榛莽
不見征戰場 那知邊人苦
馬驚西風笳 鳥散落日鼓
鳴鳴城下水 流恨自今古

掛幅装

一幅

紙本墨書

二三六×七〇

個人蔵

廣津ひろつ岱雲たいうん

父でもある師・廣津雲仙とは対照的に、非連綿の単体表現のみで書いている。一見して、劉墉の書風を基盤にしていることが明確な作であるが、その強い線からは木簡に通ずる筆意も感じる。その学書の幅からは、雲仙とはまた異なる方向の書を模索していた様子も窺え、興味深い。

劉 りゅう

蒼居 そうきよ

一九四一—二〇〇六



香川県生まれ。

木村知石に師事。

昭和六年（一九八六）書道研究玄心会理事長、

平成五年（二〇〇三）日展内閣総理大臣賞、

平成八年（二〇〇六）日本芸術院賞。

日展理事、読売書法会常任理事、

兵庫県書作家協会会長など。

「沐佛護」

沐佛護

額装

一点

紙本墨書

二二八×六七・五

玄心会蔵

劉^{りゅう}

蒼居^{そうきよ}

師・木村知石の書が基盤であると思われ、独自の世界を構築している。特に、暢達した息の長い線は、凄味を封じ込めたかのような強さを有しており、圧巻の一言である。師と同じく、米芾や王鐸が根幹にはあるのだろうか、木簡にも通ずるような筆意が見え、幅広い学書の跡が窺える。

第二部 兵庫の仮名書

日展に第五科（書）が加わり、以後展覧会芸術として書は開化していく。仮名書においては、従前までの帖・卷子といった細字中心の机上芸術から、額装を中心とした大字という新様式が勃興し、壁面芸術へと展開した。つまり、現代書道における仮名書とは、新たな表現・可能性追求の歴史であった。そして、その最前線を走り、今日までへと至る仮名書の道を切り開いた先達こそ、兵庫の仮名書家達に他ならない。

歌と仮名書の伝統を受け継ぎ、現代仮名書道の指導者として活躍した安東聖空。現代仮名書道における「間」の美学を探求し、名伯楽として多くの書家を育て上げた桑田笹舟。和様の複雑形と仮名古筆の美を巧みに調和させ、大字仮名のモダニズムを開拓した深山龍洞。古典の伝統と現代的表現との絶妙のバランス感覚により、大字仮名表現を新たな領域に推し進めた西谷卯木。兵庫の仮名書の歴史とは、現代仮名書道の歴史そのものと言っても過言ではない。

兵庫の仮名書とは、まさに私達の「伝統」であり「誇り」である。

安^{あん}東^{どう}
聖^{せい}空^{くう}

一八九三—一九八三



姫路市生まれ。

近藤雪竹に師事。

大正九年（一九二〇）文検習字科合格、

大正四年（一九一五）正筆会創立、

昭和三六年（一九六一）日本芸術院賞受賞。

日本芸術院会員、文化功労者など。

「天地」

天地のはじめゆ光る川底の
こいしをあらふ五十鈴川の水
(自詠)

額装

一点

紙本墨書

三八・五×一五四

正筆会蔵

安東聖空
あんどうせいくう

いわゆる条幅横和歌一首の作品として、一つの典型的な書式を示す。短一行を駆使した散し書きに、「継色紙」学書の明確な痕跡が認められる。やや高めの特徴的な落款印の位置が、作品の大きさを演出している。

「千鳥」

誰が年の数とかは見む行きかへり
千鳥なくなる濱のまさごを

(紀貫之)

額装

一点

彩箋墨書

一五×三三二

正筆会蔵

安東聖空

唐紙の扇面に和歌一首を散し書きする。一見して仮名書作品としての格調の高さを感じさせつつも、変体仮名を全く用いていない事に驚かされる。安東聖空晩年のライフワークでもあった、「可読性」への挑戦の一端が垣間見える一作。

池内 艸舟

一九一四—一九九三



明石市生まれ。

桑田笹舟に師事。

昭和三年（一九二八）文検習字科合格、

昭和四五年（一九七〇）日展審査員、

昭和五五年（一九八〇）兵庫県文化賞受賞。

日展評議員、読売書法会総務などの

要職を務める。

「上弦の月」

上弦の月いつまでも夕はゆる

(柳白)

額装

一点

彩箋墨書

六六×四二

個人蔵

池内 艸舟
いけうち そうしゅう

重心を紙面の上部に高く集めながら、その対比で下部の余白の「白」を鮮烈に引き立てる。現代的散らし書きの優品。あたかも題名の如く、「上弦の月」を意識したかのような洒脱な「月」の造形がおもしろい。

「春の苑」

春の苑紅にほふ桃の花
下照る道に出で立つ少女
(大伴家持)

額装

一点

紙本墨書

一七〇×四六

個人蔵

池内 艸舟
いけうち そうしゅう

縦線、および縦への動きが主体である仮名作品において、強い右上がりの横線が印象的な作品。半切二行書きというオーソドックスなスタイルでありながら、大胆に行間を絡めることでスケールの大きな仕上がりを見せる。

小澤神魚



一八九八—一九九四

山梨県生まれ。

安東聖空に師事。

昭和八年（一九三三）文検習字科合格、

正筆会副会長・理事長、日展会員、

読売書法会名誉会員、梅花女子大学教授、

兵庫県書作家協会顧問、日本書芸院参事

などの要職を務める。

「あしべゆく」

あしべゆく鴨のはがひに霜降りて
寒き夕べは大和しおもほゆ

額装

一点

紙本墨書

六八・五×三四・五

個人蔵

小澤神魚
おざわ しんぎよ

「連綿」は、仮名書の最大の特徴であり原動力である。本作は、冒頭から大胆な非連綿（放ち書き）の手法を用い、独特なリズムを刻む。氏が深く学んだ、「関戸本古今集」と良寛の書風の融合とでも言うべき世界である。

「笹の葉は」

笹の葉はみ山もさやに
さやげどもわれは妹おもふ
わかれ来ぬれば

額装

一点

紙本墨書

一三九×三七

個人蔵

小澤神魚
おざわ しんぎよ

滲みの強い素紙に淡墨で書くことで、潤渴を大胆に用いた作品。二行目の伸びやかに、緩やかに左に張り出す渴筆が魅力的である。氏が傾倒した良寛の影響がやはり強く窺えるが、連綿のリズムには「関戸本古今集」の影響が看取できる。

「東の」

ひむがしののにかぎろひの
たつみえてかへりみすれば
月かたぶきぬ

額装

一点

彩箋墨書

三七×四九

個人蔵

小澤神魚

氏が深く傾倒した良寛書風の学びが、それまでに学んだ様々な古筆の書風と融合し、氏独自の世界観を形成している。特に、「関戸本古今集」を学んだことによる強い転折と行の揺れとが相俟って、大らかな静けさをもたらしている。

桑くわ田た笹ささ舟ふね

一九〇〇—一九八九



広島県生まれ。

安東聖空に師事。

昭和三年（一九五六）現代書道二十人展出品、

昭和四五年（一九七〇）日本芸術院賞受賞。

昭和五七（一九八二）皇太子妃殿下への御進講。

日展理事、書道笹波会会長など。

「ふるさとのは」

ふるさとの山に向かひて
言ふことなしふるさとの
山はありがたきかな

(石川啄木)

額装

一点

彩箋墨書

三二×五三

神戸笹波会蔵

桑田くわた笹舟たささふね

複雑形を多用しながらも縦線を
しつかり利かし、また連綿と非連綿
(放ち書き)の対比によつてすつきり
と紙面をまとめる。藤の絵柄に合わ
せるように重心を高くし、伝統的な
扇面書式の特徴を生かした優品。

「ハハハ」

わがしのおなじころの友もがな
その数数を言ひ出でてみむ

(後村上天皇)

額装

一点

彩箋墨書

四二×六四

神戸笹波会蔵

桑田くわた笹舟ささふね

俵屋宗達下絵・本阿弥光悦書の和歌巻を思わせる、大ぶりの絵柄の料紙に、濃墨で「十五番歌合」や「正倉院万葉仮名文書」の影響を感じさせる複雑形の草仮名で書いている。笹舟の代名詞とも言うべき書風の特徴を示す作品。

桑田三舟 くわた た さん しゅう

一九二七—二〇一〇



神戸市生まれ。

桑田笹舟に師事。

平成二年（一九九〇）書道笹波会会長就任、

平成二年（一九九九）日展内閣総理大臣賞受賞、

平成四年（二〇〇二）日本芸術院賞受賞。

日展参事、読売書法会常任総務など。

「雪月花」

雪きさえてうらめづらしき初草の
はつかに野辺も春めきにけり

(式子内親王)他二首

額装

一点

彩箋墨書

五六×七六

神戸笹波会蔵

桑田三舟 くわた たさん しゅう

桑田笹舟の提唱した「三角法構成」の理論に則った正攻法の散らし書きを、料紙の下絵に調和させた作品。横張が強い特徴的な字形だが、決して縦への流れを損なってはいない。筆者は、作品に押す落款印にも独特なこだわりを見せたという。

「ほたる」

ほたる草

額装

一点

彩箋墨書

三六×五四

神戸笹波会蔵

桑田三舟
くわた たさん しゅう

近代詩文書的なタッチを想起させる、言わば「仮名の小字数書」である。しかしながら、「た」字には「太」という字母意識が色濃く見え、仮名字書による裏付けを感じさせる。またこの書式は、明らかに仮名の散らし書きに基づくものである。

小山素洞



一九一六—二〇二一

加古川市生まれ。

深山龍洞に師事。

平成十四年(二〇〇二)

日本書学研究会一先会設立、

日展参与、読売書法会参事、

日本書芸院顧問などの要職を務める。

「つ松」

つ松いくよかへぬる吹く風の

聲の清きは年ふかみかも

むめが香にたくへて聞けば鶯の聲

懐かしき春のやまざと

夏山にこひしき人やいりにけむ

こゑふりたてゝ鳴くほとゝぎす

女郎花秋野ゝ風に打ち靡き

ころひとつを誰によすらむ

落ばして庭は冬木のこがらしの

よもすがらなる月明かな

春は花夏ほとゝぎす秋は月

冬雪さえてすゝしかりけり

(市原王)

(西行法師)

(よみ人しらず)

(藤原時平)

(太田水穂)

(道元禅師)

屏風

一点

紙本墨書

一三八×三四・五×六

個人蔵

小山素洞

深山龍洞が開拓した「複雑形の仮名美」の世界を氏は継承し、さらにその世界を広げた。佐理書状といったもののみに止まらず、その学書の対象は、王鐸といった明末清初の中国の書にまで及んだという。本作からもそうした姿勢が窺い知れる。

西谷卯木



一九〇四—一九七八

神戸市生まれ。

安東聖空に師事。

昭和六年（一九三三）文検習字科合格、

昭和四三年（一九六八）現代書道二十人展出品、

昭和四八年（一九七三）日展内閣総理大臣賞受賞。

日展評議員、正筆会会長など。

「秋の風」

大門の礎こけに埋れて
七堂伽藍たゞ秋のかせ

掛幅装

一幅

紙本墨書

一三三二×三三二

成田山書道美術館蔵

西谷卯木

近藤雪竹に学んだという漢字学書の成果が、本作の持つ線の強さから看取できる。これだけ横線を利かせながらも、縦への流れを損なっていない作者のセンスに驚嘆させられる。素紙に淡墨という卯木の作品によく見られる表現だが、柔らかさの中に強さを内包した作である。

「高麗人は」

高麗人は内裏に参りて鴻臚館
あした静かに牡丹花ちる

(佐佐木信綱)

額装

一点

彩箋墨書

三六・二×一〇〇・二

成田山書道美術館蔵

西谷卯木

卯木の代名詞ともなっている「右下がりの世界」を、遺憾なく発揮した優品。右下がりの横線によってもたらされる広やかな間が、画数の多い漢字を、単純形が主体である仮名の中に上手く調和させている。連綿と非連綿（放ち書き）の効果的な対比が印象的な作である。

宮重小蘭
みやしげしょうらん



一九二四—二〇一八

神戸市生まれ。

深山龍洞に師事。

昭和五年（一九七六）蘭社創立。

日展会員、日本書芸院参事、

兵庫県書作家協会会長などの要職を務める。

「夕されば」

夕されば
をぐらの山に
鳴く鹿の
こよひはなかず
いねにけらしも

額装

一点

紙本墨書

八三×一六〇

兵庫県立美術館王子分館

原田の森ギャラリー蔵

みやしげ
宮重 小蘭
しょうらん

複雑形と単純形の造形美が、見事に調和した作品。現代仮名書道の作品として、洗練された様式美を備えている。深山龍洞が開拓した「複雑形の仮名美」の世界は、ここにも継承されている。女流らしい柔らかさが加味され、独自の世界を展開する。

「いはばしる」

いはばしる
たるみのうへの
さわらびの
もえいづるはるに
なりにけるかも

掛幅装

一幅

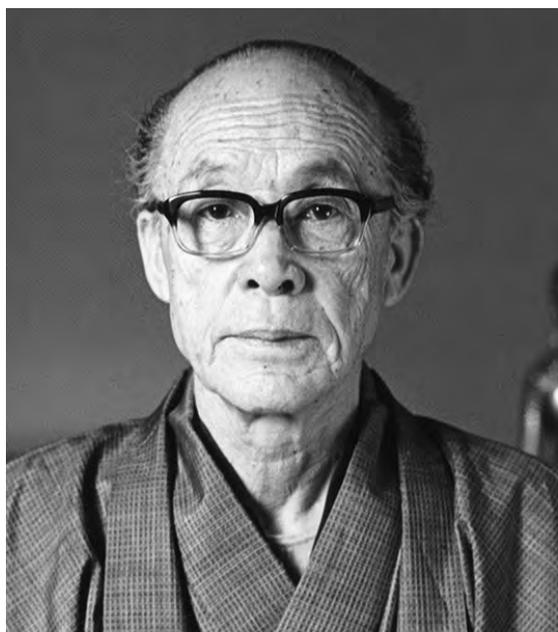
彩箋墨書

二六×一五

個人蔵

みや みや しげ しげ
宮重 小蘭 しょうらん

一見して「香紙切」の有する、「細身」と「流動」の世界観を彷彿させるが、決してそのままではない。大字仮名で鍛えた直線を加味しながら、紙面の右に全体を大きく寄せ、緊張感のある凜とした空間を構築している。



深^み
山^{やま}
龍^{りゅう}
洞^{どう}

一九〇三—一九八〇

津名郡仮屋町生まれ。

桑田笹舟に師事。

昭和四年（一九二九）文検習字科合格、

昭和二三年（一九四八）二東書道会創立、

昭和五〇年（一九七五）日展内閣総理大臣賞受賞。

日展評議員、朝日現代書道二十人展出品など。

「万葉長歌並びに反歌」

御食むかふ あはぢの島に
たゞむかふ 敏馬のうらの
沖邊には ふかみるとり
浦回には 名告藻かる
深海松の 見まくほしけど
なりのその 己が名惜しみ
間使も 遣らずて吾は
いけりともなし
反哥一首
すまのあまの塩焼衣の馴れなばか
一日も君を忘れて思はむ

一九六一年
屏風

一点

紙本墨書

日展菊花賞受賞作

五四×八九×二

兵庫県立美術館蔵

深山龍洞

龍洞と言えは、「紫式部集抄」に代
表される「関戸本古今集」書風によ
る作風から、本作に代表される佐理
書状をベースにした作風への、劇的と
も言える転換がドラマティックに語
られる。対極とも言えるその書風の
「転換」と言うか、ある種の「融合」
は、天才・龍洞のセンスと人並み外れ
た修練を以ってして初めて成し得た
業であろう。

山口 南艸
やまぐち なんそう



一九三一—二〇〇四

神戸市生まれ。

桑田笹舟・池内艸舟に師事。

書道草心会創設、日展会員、

読売書法会常任理事、日本書芸院参事、

兵庫県書作家協会参事などの要職を務める。

「沫雪」

沫雪の
ほどろほどろに
降り敷けば
平城の京し
思ほゆるかも

額装

一点

紙本墨書

五九×九一・五

草心会蔵

やまぐち
山口 南艸
なんそう

大きく広やかな文字の懐と、行間等の余白が溶け合い、作品全体にダイナミックな表情を生み出している。分類上、大字仮名に分類されるであろうが、大字仮名とは思えない細やかさがある。この細やかさは、確かな古筆学書の裏付けを物語っている。

「ペチカ」

雪のふる夜はたのしいペチカ
ペチカ燃えろよお話しましよ
むかしむかしよ燃えろよペチカ
雪のふる夜はたのしいペチカ
ペチカ燃えろよおもては寒い
栗や栗やと呼びますペチカ
雪の降る夜はたのしいペチカ
ペチカ燃えろよじき春来ます
いまに楊も萌えましよペチカ

額装

一点

紙本墨書

一四二×五〇

草心会蔵

やまぐち なんそう
山口 南艸

仮名は、縦書きで連綿することでもまれた。仮名の本来的な美に挑戦するかのような作品である。横書きで変体仮名・連綿あり、そして、カタカナ・アルファベット・数字を交える。かつて、このような作品があつたであろうか。この作は、山口南艸がいかに非凡であつたかを示すまさに証左と言えよう。

山本御舟 やまもとぎよしゆう

一九〇七—一九六八



宍粟郡下三方村生まれ。

桑田笹舟に師事。

昭和三九年（一九六四）青硯社創設、

昭和四〇年（一九六五）日展菊華賞受賞、

昭和四二年（一九六七）

NHKテレビ婦人百科講師として出演。

日展審査員、親和女子大学講師など。

「九條武子の歌」

やま桜今狂乱の舞をまふ
四月半の山荘のよひ

屏風
一点

紙本墨書

九三・五×五八×二

個人蔵

やまもと ぎよしゅう
山本 御舟

思い切った筆致に、大胆な墨量の変化。しかしながら、仮名としての品位を全く失っていないことに驚かされる。古筆学書によって習得された伝統的な散らし書き書式と、近代以降の新しい大字仮名表現の見事な融合に、筆者のセンスを感じずにはいられない。

「九條武子の歌」

千万の寶は虚し貴きは
親よりつづく唯此身のみ

額装

一点

彩箋墨書

一五〇・五×四〇・五

個人蔵

やまもと ぎよしゆう
山本 御舟

一行目下部と二行目上部の墨量が、紙面に広がりをもたらし、渴筆に奥行きを生む。連綿および筆の腹を利かせた用筆からは、「関戸本古今集」の影響が看取できる。オーソドックスな半切二行書でありながらも、独特な空間構成を見せる作である。

「朝茶のむ」

朝茶のむ僧しづかなりきくの花

額装

一点

紙本墨書

一四五×三八

個人蔵

やまもと ぎよしゅう
山本 御舟

「きくの花」で墨量を出すことで重心を低くしているが、一行目の書き出しを思い切って下げることで、紙面全体としての高まりを演出する。極限にまで墨をおとした渴筆が、作品に奥行きと透明感を生み出す。

第三部 兵庫の篆刻

近代以降、展覧会芸術としての書の一部となった篆刻は、広大な展示空間の中で、方寸の印面に繰り広げられる世界を壮大なものへと展開していった。また、中国では古代文字資料の発掘・発見が相次ぎ、書の歴史を紀元前三千年以前にまで広げた。そして、戦後に書家達が中国との交流を積極的におこなったことで、多くの古典資料が日本にもたらされ、近代以降の篆刻はこうした様々な成果を多いに享受することで発展したのであった。

そうした中、関西においては、梅舒適という逸材が現れ、文人氣質を備えた感覚的とも言える表現・刻風は現代篆刻に新たな息吹をもたらし、関東の名手・小林斗盦と競い合うようにして現代篆刻を大いに盛り上げたのである。

兵庫の篆刻は、そうした梅舒適の刻風が、神戸を中心に根付いた独自の書道文化と組み合わせることで、他地域とは少し異なる、篆刻に対する見方・考え方を根付かせたとも言えるだろう。

兵庫の篆刻もまた兵庫の書の誇りなのである。

邊^{へん}
見^み
仿^{ほう}
厓^{がい}



一九二六—二〇一一

兵庫県美方郡生まれ。

梅舒適に師事。

読売書法会参与、日本書芸院参事、

兵庫県書作家協会参事、

日本篆刻家協会顧問などの要職を務める。

「昔之得一者」

天得一以清
地得一以寧

掛幅装

一幅

紙本墨書

一三九×三五

個人蔵

邊見へんみ 仿厓ほうがい

古来より、「詩」「書」「画」「篆刻」の四つを四絶と称し、文人に必要な教養として尊重されてきた。本作は、朱・白の印を二顆押印し、同一紙面に題と落款を書す。まさに、「書」と「篆刻」が同源の教養であることを、この作は物語っていると見えよう。

「篆刻」一方

地震かみなり
火事おやし

額装

一点

三四×四五・五

個人蔵

邊見 仿厓

昭和に巻き起こった、書における「素材」と「可読性」の問題は、現在進行形のテーマであろう。本作は、言うなれば漢字仮名交じり（調和体）の篆刻である。少ないながらも、こういう例は他にも存在する。しかしながら、本作も紛れもなく、果敢に前述のテーマに挑んだ意欲作に他ならない。

「桃李自成蹊」

桃李自成蹊

掛幅装

一幅

紙本墨書

七〇×三六

個人蔵

邊見 仿厓

本作は、白文の印を一顆押印、題と落款を書し、題材に関連すると思われる画像石風の拓を紙面下に配すという、非常に洒脱な形式の作品である。書画篆刻というジャンルが、歴史や伝統の上に則ったものであるという筆者のスタンスや、その教養の深さの一端を滲ませている。

第四部 兵庫の前衛書

一九四〇年代に起きた抽象表現主義は、瞬く間に世界を席捲した。日本の書家達の中にも、そうした流れを敏感に感受する者が現れ、現代書道における前衛書は一気に盛り上がったのだった。

上田桑鳩、宇野雪村、森田子龍といった面々は、みな日本における前衛書のパイオニア達である。兵庫の前衛書の先達は、その時代毎の言葉を書く「書」という芸術において、現代の書を作る為には、古典を学びつつもその枠に留まらない表現が必要であるという信念の下に積極的な活動を行った。書道史上の古典の伝統や、西洋の美術・美学という学術的基盤の上に成立したその表現は、極めて革新的だったこともあり、時として書壇から冷視されることもあった。しかし、彼らの信念とそれに基づく書業は「書」として確固たるものであった。やがて、手島右卿や井上有一の書を通して、世界は日本の前衛書を知ることとなる。そしてその源流には間違いなく兵庫の前衛書のイズムが宿っているのだ。

上田桑鳩

うえ

だ

そう

きゆう

一八九九—一九六八



美囊郡奥吉川村生まれ。

比田井天来に師事。

昭和五年（一九三〇）

泰東書道院展文部大臣賞受賞、

昭和一五年（一九四〇）奎星会創立、

昭和三六年（一九六二）

サンパウロ・ビエンナーレ特別出品など、

前衛書のパイオニアとして活躍。

「白楽天詩」

上田 桑鳩
うえだ そうきゆう

蝸牛角上爭何事 石火光中寄此身
隨富隨貧且歡樂 不開口笑是癡人

屏風

一点

紙本墨書

一三四×五四×二

武庫川女子大学付属高等学校蔵

前衛書（墨象・抽象書とも）のスタートは、上田桑鳩が牽引した戦前の書道芸術社の活動に端を発すると言われる。本作は、極限にまで墨の潤渴の差を強調し、鑑賞者に強烈なインパクトを与える。しかしながら、その造形には北魏風も見え、伝統に裏付けされながらの、書美の解体と再構築であったことが分かる。

宇野雪村うのせつそん



一九二二—一九九五

美方郡大庭村生まれ。

上田桑鳩に師事。

昭和二四年（一九四九）

第五回日展で特選受賞（翌年連続受賞）、

昭和四五年（一九七〇）

大阪万国博覧会世界美術展出品。

大東文化大学教授などを務め、

教育・普及にも貢献。

「一期一會」

宇野雪村うのの せつそん

一期一會

額装

一点

紙本墨書

一三八×六八

武庫川女子大学付属高等学校蔵

上田桑鳩に師事した宇野雪村は、桑鳩の前衛書運動をより具体化・理論化し、その構築を推し進めた。本作は、中国・漢代の刑徒磚をモチーフにしてあるものと思われるが、刑徒磚の表現を借りながら、紙面全体に文字を再構築し、独自の表現を試みている。



上^{うえ}
松^{まつ}
杜^と
暘^{よう}

一九一三—一九八三

神戸市生まれ。

上田桑鳩に師事。

飛雲会代表、兵庫県書作家協会理事長、
毎日書道展審査会員などの要職を歴任し、
兵庫の前衛書の発展に貢献。

「窟」

窟

額装

一点

紙本墨書

三四・五×四五

個人蔵

上松 杜暘
うえまつ とよう

「窟」の文字の意は、「ほらあな」「あなぐら」である。本作は、あたかもその意を書として表現しようとして試みたかのように、紙面からはみ出さんばかりの黒の力が、「ほらあな」の深さを表現しているようにも見える。漢字の持つ表象性に注目し、それを強調した書表現として捉えられようか。

「巖」

巖

掛幅装

一幅

紙本墨書

一三六×三五

個人蔵

上松 杜暘
うえまつ と しょう

本作の墨色や筆触からは、江戸時代中期の禅僧・白隠の墨跡を想起する。また、禅僧の墨跡には棒図と呼ばれるものが存在するが、その類のものも頭をよぎる。前衛書運動に関わった書家達は、高い精神性から墨跡に大いに注目した。本作も、そういった流れに連なるものであろうか。



上^{うえ}
羅^ら
芝^し
山^{ざん}

一九二六—一九九五

美囊郡吉川町生まれ。

上田桑鳩に師事。

飛雲会理事長、兵庫県書作家協会理事長、
毎日書道会評議員などの要職を務める。

「莫妄想」

上羅芝山
うえら しざん

莫妄想

掛幅装

一幅

紙本墨書

六六×八六

兵庫県立尼崎小田高等学校蔵

扇面に筆線で枠を施した中に、「莫妄想」の三文字を草書で書している。全体的に重心を上げながら脚部を明るくするという、伝統的な扇面書式の手法でまとめている。前衛書運動に関わった書家達が、伝統的な書道技法も習得していた事実を、本作は如実に物語っている。

「一微塵」

上羅芝山
うえら しざん

一微塵

掛幅装

一幅

紙本墨書

二〇四×六七

兵庫県立尼崎小田高等学校蔵

本作の表現の根底には、恐らく江戸時代後期の真言宗の僧・慈雲の墨跡のイメージがあるものと思われる。一線一線に気持ちを含めながら、文字の密度を高め、一気呵成に運筆する。そういつた揮毫光景が、まごまごと目に浮かぶ思いがする。



藤原清洞

一九一四—二〇〇二

加東郡東条町生まれ。
上田桑鳩・宇野雪村に師事。
武庫川女子大学教授、飛雲会会長、
兵庫県書作家協会会長などの要職を務める。

「耿」

耿

額装

一点

紙本墨書

三三・五×四五・五

個人蔵

藤原清洞
ふじわらせいどう

昭和は、書において大きな変革の時代である。前衛書運動と共に、手島右卿らを中心に象書運動（小字数書運動）が起こった。本作も文字造形を極限にまでデフォルメしながら、「耿」の一字を大書する。まさに前記の二運動の動きに連なる作品であると言える。

「音水湖畔」

音水湖畔

額装

一点

紙本墨書

四四×六八

個人蔵

藤原清洞
ふじわらせいどう

本作は、特に線質において、師である上田桑鳩の作品の筆致に極めて近い。また、副島蒼海の「積翠堂」等の作品に近い特徴も示す。師風も学びながら、貪欲に多方面の書作品から刺激を受けていた様子が窺える。

「抱」

抱

額装

一点

紙本墨書

六七×一一五・七

個人蔵

藤原清洞
ふじわらせいどう

同時代の書作品にも多く見られるが、本作も恐らく、筆を二本同時に握って揮毫したものと思われる。漢代の摩崖や北魏の鄭道昭といった趣の、息の長い線で書している。紙面全体に、白と黒をバランスよく配するこの作品からは、前衛書や小字数書と呼ばれるジャンルの書作品における絵画性を感じさせられる。



道^{みち}
方^{かた}
芳^{ほう}
堂^{どう}

一九三三—二〇一四

神戸市生まれ。

宇野雪村に師事。

武庫川女子大学教授、奎星会参与、

毎日書道会参事、飛雲会顧問、

兵庫県書作家協会顧問などの要職を務める。

「霽」

霽

額装

一点

紙本墨書

三四・五×二三・五

個人蔵

道方みちかた芳堂ほうどう

書において、点の配置は極めて重要である。「霽」の字意は、「はれる」「はれわたる。」であるが、本作は、点を主体としながら文字の中に大きく白を取り込み、その字意に込められた明るさを表現しようとしたのであろうか。

「韋振詩」

林外雪消山色静
窓前春淺竹聲寒

掛幅装

一幅

紙本墨書

一三九×三六

個人蔵

道方みちかた芳堂ほうどう

本作は、師である宇野雪村の書風の影響を色濃く表出している。宇野雪村は、理論的に書美を構築しようとしたが、本作における文字造形のデフォルメからも、そうした雪村イズムの継承がはつきりと見て取れる。

井^い茂^{しげ} 圭^{けい} 洞^{どう}



〈役職〉

文化功労者

日本芸術院会員

日展理事

京都教育大学名誉教授

読売書法会最高顧問

日本書芸院最高顧問

全国書美術振興会名誉顧問

全日本書道連盟名誉顧問

兵庫県書作家協会顧問

一東書道会会長

日本書道ユネスコ登録推進協議会副会長

「速 總」

井^い茂^{しげ}
圭^{けい}洞^{どう}

女鳥のわが王の
織ろす服誰が
料ろかも

高行くや速總別の
御襲が料

雲雀は天に翔る高行くや
速總別鷓鴣捕らさね



榎^{えの}
倉^{くら}
香^{こう}
邨^{そん}

〈役職〉

日展名誉会員

読売書法会顧問

日本書芸院最高顧問

全日本書道連盟顧問

全国書美術振興会顧問

兵庫県書作家協会顧問

書道香瓔会会長

「山を見よ」

榎倉香邨
えのくらこうそん

山を見よ

山に日は照る

海を見よ

海に日は照る

いざ唇を君

眼をとちつ

君樹によりて

海を聴く

その遠き音に

なたのひそむや

(牧水)



黒田賢一
くろだけんいち

〈役職〉

日本芸術院会員

日展副理事長

日本書芸院最高顧問

読売書法会最高顧問

兵庫県書作家協会顧問

正筆会会長

「桜」

黒^{くろ}
田^だ
賢^{けん}
一^{いち}

桜咲く遠山鳥のしだり尾の
ながながし日も飽かぬ色かも
(後鳥羽上皇)

六三×一八一



菅野清峯

〈役職〉

毎日書道展常任顧問

兵庫県書作家協会顧問

奎星会特別顧問

飛雲会名誉会長

鋤

鋤

11111×1011

菅野清峯
すがのせいほう



山根 互清

〈役職〉

日展会員

日本書芸院董事

読売書法展常任理事

兵庫県書作家協会顧問

正筆会理事長

「きりぎりす」

山^{やま}根^ね
互^{こう}清^{せい}

夜をこめて

麦つく音や

きりぎりす

蓮の実のこぼれ

尽して何もなし

八三×九四

「窓の春」

山^{やま}根^ね
互^{こう}清^{せい}

竹の影 梅の影あり 窓の春

一三九×三七



横山焯平

〈役職〉

日展特別会員

日本書芸院副理事長

兵庫県書作家協会顧問

日本書学研究会一先会理事長

京都橘大学名誉教授

「百人一首抄」

横山焯平
よこやまこうへい

君がため 春ののいでて わかなつむ
わがころもでに 雪はふりつつ(光孝天皇)

夏のよは まだよひながら あけぬるを
くものいづこに 月やどる覧(清原深養父)

他